

保健室への頻回来室をめぐる「問題」

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会行動クラスター

保健室に求められる機能、養護教諭に期待される役割は、時代の流れ、その社会の要請に伴い刻々と変化してきた。近年においては「保健室登校」のクローズアップとともに「心の居場所」として保健室の機能が重視され、養護教諭の役割が見直されるようになっていく。しかし、拡大・変化し続ける保健室の機能や養護教諭の役割に、その将来像を展望することができず困惑している養護教諭は少なくない。これは養護教諭の実践が子どもを中心とした、親、教師、学校組織など学校システムとのネゴシエーションの末に成り立っていることに起因すると筆者は考える。

そして、エスノグラフィーによってそのネゴシエーションの渦中にみられる相互の関係性に注目しながら、学校の中の保健室という空間のもたらす機能、養護教諭の子どもへの関わりとその役割について捉え直すことができないかと考えた。

本研究では、養護教諭として中学校の保健室に勤務する筆者自身が子どもたちにとっての保健室の意味づけ（なぜ保健室に来るのか）や養護教諭の関わりの有り様を明らかにするためにエスノグラフィーの記述を試みた。

第1章では保健室の機能、養護教諭の役割の変遷について振り返り、保健室機能の拡大の中で養護教諭が抱えている課題、問題について、概略を示した。

第2章では、これまでの養護教諭の研究において行われている、事例を中心とした研究、実践報告において陥りやすい問題点を指摘し、学校臨床的な視点からエスノグラフィーを記述することの意義を示した。

第3章では、中学校でのエスノグラフィーを通して、生徒の頻回来室という「問題」についてその諸相を明らかにした。

第4章では、第3章で明らかとなった養護教諭自身の「問題」認識の変化から、養護教諭の役割について考察した。

本研究において、保健室は学校や社会の抱えている「問題」を可視化（顕在化）させる機能を備えた場所であることが示唆された。その中で、養護教諭は「問題」に対してどのような姿勢で関わっていくかを常に考えなければいけない。養護教諭の実践の姿勢（まなざし）を相対化する手段として、従来からの事例研究のあり方を問い直し、臨床的な視点に立ったエスノグラフィーによって「問題」を捉え直すことが有効であると考えられる。